



俺はボモじゃないし、
セフレもいる

◆
天地神明に誓って言うが、俺——高良翔太は、女が好きだ。

遺伝子の端々に至るまで、極めて健全かつ救いようのないヘテロセクシャルである。どれくらい女が好きかといえば、春先の生温かい風に揺れる薄手のカーデイガンを見るだけで胸が苦しくなるし、街ですれ違う女性のうなじの後れ毛に視線が吸い寄せられれば、心拍数は平気で二十跳ね上がる。六畳一間のアパートにあるデスクトップPCの奥深く、三重のパスワードをかけた隠しフォルダには、四百ギガバイト超のグラビア画像と動画が整然と分類されて眠っている。

自家発電は一日三回が基本運行。気圧と体調のバイオリズムが完璧に噛み合った祝祭日には、五回を記録することすら珍しくない。先月、ついに大台の八回到達した際は、膝の震えとともに「毎日のスクワットと納豆ご飯こそが男の最後の砦である」という神託めいた真理を得たほどだ。

要するに俺は、世の片隅でひっそりと呼吸している、ただの愚直なシコ猿に過ぎない。

そして——そんな俺には、セフレがいる。

だから俺はホモじゃない。完璧な論理武装だ。反論の余地など埃ひとつ分もありはしない。

セフレの名は、白瀬游という。

同い年。見事なまでにショートヘアが似合う、悔しいくらいに顔のいい奴だ。すらりと伸びた手足に、少し色素の薄い白い肌。笑うと八重歯——というよりは、子犬のそれめいた小さな犬歯が唇の端から覗く。

風が吹くたびにさらさらと揺れる黒髪からは、ドラッグストアで一番人気のシトラス系のシャンプーンが香る。声は、低すぎず高すぎず、少年合唱団の残響をそのまま大人にしたような、耳朶にすんなり染み込む不思議な中性トーン。そして何より、エッチが好きで、俺と抜群に相性がいい。

非の打ち所がない、理想のパートナーである。

——ただし。神様というやつが、悪戯半分でサイコロを振り間違えたと思えない「一点」を除いては。

・
・
・

ガチャリ、と金属が擦れ合う音がして、鍵が回った。金曜の夜八時。呼び鈴など鳴らすはずもない。合鍵で勝手に入り込んでくる、それが白瀬の流儀だった。

「翔太あ、生きてるー？」

玄関先でスニーカーが雑に脱ぎ捨てられる音。濡れたような重いコートの擦れる音。ついで、ためらいなく冷蔵庫の扉が開かれ、冷えた缶ビールが取り出される音。

自分の城のすべてを掌握されているこの気安さ——普通なら男冥利に尽きるシチュエーションだろう。だが、俺は万年床の煎餅布団の上で、スマートフォン画面を握りしめたまま、背筋に冷や汗を伝わせていた。

白瀬の声は、いつだって変わらない。男の時も、女の時も。あの透明で耳当たりのいい中性的な声のままなのだ。耳を澄ませても、息遣いを盗み聞いても、判別は不可能。

そう、白瀬游は、いわゆる「TS 体質」という、生物学の教科書が裸足で逃げ出すような奇病——いや、奇妙な体質を抱えて生きている。

トランスセクシャルだのジェンダーアイデンティティだのという、内面的な葛藤の話ではない。もっと暴力的で、物理的で、不可抗力な現象だ。周期も予兆もなく、白瀬の肉体は気まぐ

れに男になり、また女に戻る。

高校時代、本人は「まあ、生理の親戚みたいなもん」と紙パックのいちごオレを吸いながら嘯いていたが、生理が来たからといって股間に突起物が新生する女子高生がどこの世界にいる。逆もまた然りだ。

しかも厄介なことに、男の白瀬と女の白瀬は、ガワがほとんど変わらない。身長は百七十センチで据え置き。骨格の華奢さも、肌のきめ細やかさも大差ない。男の姿になっても喉仏はほとんど主張せず、服を着てしまえば、中性的な美少年か、ボーイッシュな美少女かの二者択一を迫られるだけだ。

違うのは、胸のふくらみと、下着の奥の形状だけ。

そして白瀬游という生き物は、男であろうと女であろうと、等しく貪欲に「エッチ」が好きだった。

「やつほ、きちゃった♡」

薄い居間のドアを開けて、白瀬が入ってくる。右手にプレミアムモルツのロング缶。左手で黒のオーバーサイズコートを肩から滑り落とす。下に着ているのは、首元までぴっちりと覆わ

れた黒のリブタートルネックと、スキニーデニム。

胸元が平坦なのか、それともかすかな弧を描いているのか——黒という収縮色は、俺の必死の視線をあざ笑うかのように情報を遮断していた。

今日の白瀬は、男か、女か。

セフレなのだから女に決まっているだろう、と嘲笑う者がいたら、俺はそいつの胸ぐらを掴んで「世間知らずめ」と怒鳴りつけてやりたい。現実はいつだって、童貞の妄想よりもずっと奇怪で、理不尽に満ちているのだ。

（体験版はここまで）

俺はホモじゃないし、セフレもいる
～今日のあいつは男か女か～
体験版

わんわんガーデン